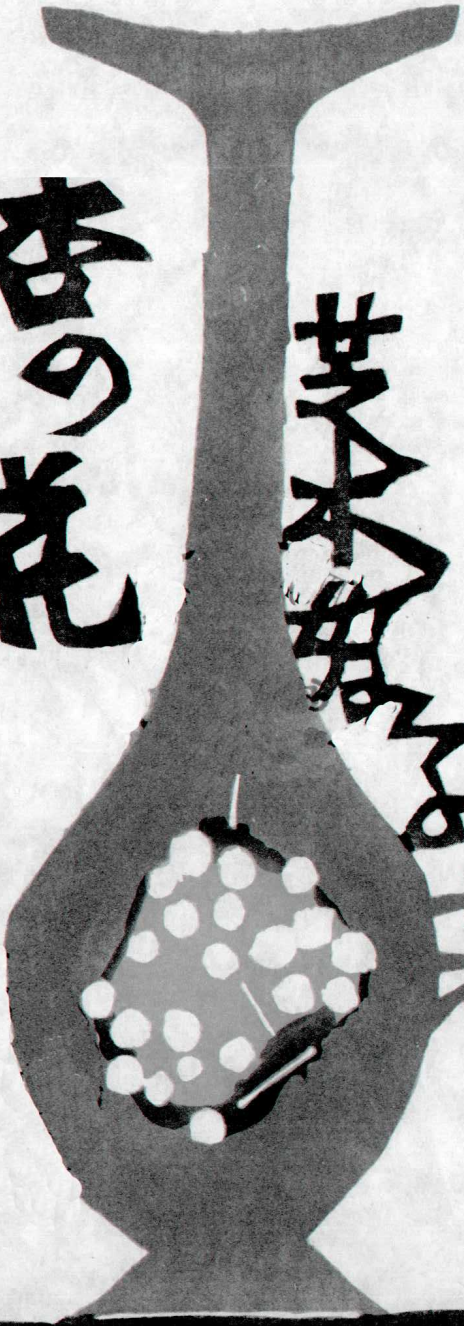
杏の花

芝木好子 著



杏の花

昭和五十二年二月一日　第一刷

著者　芝木好子
発行者　沢藤盛祐
発行所　株式会社　芸術生活社
東京都渋谷区神山町一六番一号
郵便番号一五〇振替東京一―三〇六七〇
電話東京（〇三）四六九―一一五一代表

印刷　壮光舎印刷株式会社
製本　ナショナル製本

万一落丁乱丁の場合はお取り替えいたします
定価はケースに表示してあります

© Yosiko Sibaki, 1977 Printed in Japan 0095-1211-1892

目

次

I

珠のきらめきに似て　11
美のコレクション　15
壺——備前焼　19
透明なガラスの夢　28
塗物のたのしみ　39
民芸館　48
千代紙　折紙　57
革工芸の道　66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

染繡の華麗 75

II

杏の花 87

いけばな創造 91

花に賭ける 95

染色美 99

秋篠寺の技芸天 103

人形の世界 107

人形と私　111
オペラの思い出　115
歌舞伎の美　124
髪飾り　128

Ⅲ

花の旅　135
樋口一葉の跡　153
ヴェネチアの絵　162

パリの画家　166
日本画にみるもの　175
宝石　179
越前海岸から若狭を訪ねて　192
インドの旅　タージ・マハル　201

Ⅳ

鏑木清方――内面の美を求めて　219
あとがき　241

装幀　芹沢銈介

杏の花

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

I

珠のきらめきに似て

青磁のやきものに魅せられたのは、ある陶芸家の焼いた一個の茶碗を見た時からである。その深目の茶碗は淡い青磁で、いくらか紅がかかっていて、しっとりとしたものだった。茶碗を手にして長いこと私は眺めていた。すると持主の美術評論家K氏は私の関心をみてとって、その作家のことを話してくれた。日本のたくさんの陶芸家の中で青磁を焼かしたら最もすぐれたひとりだということであった。しかしどの会にも属していないので、見たいというとどこへ行ったらよいか、とK氏はためらった。私は俯いていた。そんなら本人に会ってその青磁をみて、なお心を惹かれるかどうか試してみたい、そう思った。

やきものの好きな私は長いことただわけもわからず陶器を見たり、本を読んだりしていたが、その頃になって陶芸家の窯を二、三見る機会にめぐまれていた。その道に徹した人の人柄

も作品もおおかた私の心をとらえたが、迷いこむということはなかった。一個の青磁の茶碗が私の心を離さなかったのは、青磁のもつ清澄な典雅さが珠のように見えたからである。その後私は単身陶芸家加藤嶺男氏の許をおとずれて、作品を見せてもらう機会にめぐまれた。結果を言うと私を惹きつけた深目の茶碗は氷山の一角にすぎなかったのである。

今日私たちは美術館などでずいぶん見事な中国の陶器をみることが出来る。人気のない展示室になにげなく置かれた壺や皿の名品と向きあうと、その空間を充たす凜とした気配、気品あふれるゆたかさ、静かなやすらぎに幸福感をおぼえるのである。私はいつも、

（一体この陶器はどれだけ生きてきたのだろう、八百年か千年だろうか。その長い歴史の間割れもしないなんて、どれだけの人間の思いが籠っているのだろう）

と思うのだった。人間のもつ美への渇仰がこうして損うことなく守り続けた執念に感嘆するのであった。

安宅コレクションに納められた「青磁鳳凰耳花生」は高さ二九・三センチの艶やかな青磁で南宋の竜泉窯と伝えられる、重文である。形は砧で、首の両側に耳のような飾りがあって、その姿は高貴としか言いようがない。青磁は北宋官窯・汝官窯などですぐれたものを生み出して

いるが、宋室の南渡とともに（一一三二年）都は杭州に移った。南宋の窯としてこの竜泉窯がある。杭州の南、鳳凰山下の皇居内にあった窯というからこの名が付されたのだろう。見ているとやきものの埒を越えて宝玉の眩さ、幽玄さに打たれてしまう。これほどのものを作った工人の名は記されていないが、精魂こめて形造り、釉薬をほどこし、情熱と祈りをこめて火に焼いたのだろうと思う。中国のやきものの長い伝統はすばらしいとしか言いようがない。

私が日本で知ることの出来た陶芸家の青磁もまた汝官窯を目標にしていたという。陶芸家の家で私は数点の青磁を見せてもらった。首の長い、底のふっくらとひろがった青磁砧は青藍色の釉があざやかにかかっていた。これは皇室の新宮殿へ納めた砧の写しということであった。青磁の肌には貫入（亀裂）が模様のように入っていた。次は平鉢で、この貫入は特にこまかく鉢の内も外もおおって、翠青色に網目のような茶の貫入がひときわ繊細で、ダイヤモンドがきらめいたように見えた。また飾り棚には香爐があったが、これは窯変米色青磁であった。窯の中の位置や、火の当り具合でおこる焼きの変化を窯変という。青磁の窯変で枇杷色になるのを米色と言った。どのやきものも深い静かなたたずまいで、吸いこまれるような気がした。

この時から私は青磁に惹きこまれてしまった。きれいな粉青色も、淡い淡い青磁色も、月白

青も、人間が土と火で焼き上げたものだった。作った人の感性がそこに生きているのだった。砧の形もさまざまで、陶芸家は轆轤の動きにリズムを合せながら、瞬時に形を造ってしまう。くわしいデッサンを描いたりはしないようである。火は人間の意志通りに燃えて、釉の色をうまく発色さしてくれるのだろうか。私は美しいやきものを見ると同時に、その作者の内側をのぞきたい気がした。きびしい苦しい精進なしに、偶然の僥倖を当てにして優れたものが生れるとは思えなかった。いつか私は青磁の虜になってしまった。

日本の青磁も北宋官窯や南宋窯を学んだあとに、新しい視点を加えた青磁のやきものを作りはじめている。私は年をとって動く気がしなくなったら、身近かに一つか二つの陶器をおいて眺めたり、会話を交したりしたいと思う。珠のような砧や壺はやさしく寄りそってくれるにちがいない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook